

令和6年度 各区事務局会議 個別事例から見つかった課題

資料 2-4

フォーマット(1)に記載した事例概要のうち、事例を通して課題が見つかり、協議会で協議したい場合は、記載してください。

葵 区

課題発見のきっかけとなった事例番号（フォーマット(1)の①～⑥を選択してください）	
③未就学児、ASD（自閉症スペクトラム症）、児童発達支援の困難さ、他職種連携	
事例の概要	
対象者：ASD の4 歳児 概 要：保育園に行き渋りのある児童へ 児発の提案で保育所等訪問支援サービスを 導入しようとしたが、児発と保育園の方針が 合わず、両親が間に挟まれ、混乱が生じた 事例 （報告者 きらり）	
課題	
・サービス事業所が保護者にサービスの申請を勧め、計画相談には相談も報告もない。保護者から計画相談に計画作成の依頼があるが、サービスを使う理由を親に聞くと「わからない、事業所に言われたから」と言われる。 ・保護者によっては計画相談と一度も会ったことがないと話を聞くことがある。 ・サービスが始まると計画相談抜きで会議が進められている。 【他 4 件】	課題 相互理解 制度の理解 ↑ ↓ 福祉・他分 野との連携 事業所・ 支援員の 質 保護者支援
・計画相談のモニタリングが 6 ヶ月に 1 回しかないため、情報を得る機会が少ない。 ・サービス事業所の相談支援の理解不足から計画相談が不在のままサービス調整が進んでしまふことで、アセスメントされずにサービスが開始してしまう。 【他 31 件】	
・事業所の支援員の中には、園や学校に対して挨拶をしない、教育方針に対してダメ出しをすることがあり、相手を不快にさせる人がある。 ・保育所等訪問支援の報告内容が『手を挙げて発表できた、椅子にちゃんと座っていたから心配ないよ』という内容で、支援ではなく授業参観になっている。 ・事業所に保育所等訪問の必要性を確認しても理由は不明確な上に、中には同法人で勧められることがあり、単価が高いので報酬目当てかもしれないと感じる。 【他 15 件】	
・計画相談が保護者へ助言をしても理解が得られず抵抗感を示し拒否をされる。 ・母が園や事業所を崇拝して、計画相談に一方的な意見を言うことで相談にならない。 ・親に病気や障害があることで、子どもの状態を説明しても理解が得られない。 ・両親、家族間の意見の相違でサービス調整がうまく進まない。 【他 10 件】	
<好事例> → <u>早期連携が上手くいくと好事例に繋がる</u> 【10 件】 ・就学前から児発や保健福祉センターが介入していたことで、福祉と教育機関との連携が取りやすかった。 ・各関係機関の役割を理解した対応ができている。	
考察	
今回の事例を通じ、早期療育の体制を整えることの重要性を感じる。このことを考える事は強度行動障害や支援困難となるケースへ発展させないためのきっかけにもなるのではないかと考えた。	

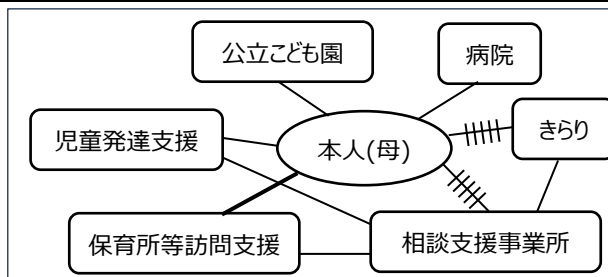
課題発見のきっかけとなった事例番号（フォーマット(1)の①～⑥を選択してください）

② 障害児 保育所等訪問支援 親の理解 支援者の理解

事例の概要

多動・衝動性がある 5 歳の幼児。診断は「グレーゾーン」「多動傾向」であり「知的には平均だし、大きくなれば落ち着くかも」と主治医に言われている。児発と訪問支援を利用している。こども園、支援者、母親で意見の相違がある事例。

（報告者 きらり）



課題

- ・こども園が本人以外の支援まで求めてくる。逆に支援員がクラス全体にアドバイスを積極的にやろうとするケースがあった。
- ・特別支援学校への事業説明がなく、依頼があった際に誰も制度が分からず苦労した。
- ・保育所等訪問支援について、それぞれの立場でそれぞれが自身に都合のいいように理解している。

⇒ 制度の理解不足
（全 24 件）

- ・計画相談事業所がサービスについて詳しくなく、サービス提供事業所主導で話が進んでいる。
- ・金髪の支援員、タトゥーのある支援員が来るので本人が拒否する。
- ・訪問し、ただ子供を眺めているだけの支援員がいる。

⇒ 事業所や支援者の質の問題
（全 14 件）

- ・親の意見と学校の意見が食い違い、支援員が板挟みとなっている。共通認識が上手くいかない。（親の要望が強すぎる）
- ・学校、親、サービス提供事業所だけで話が進み、計画相談が仲間に入れない。
- ・学校から「内政干渉だ！」と言われた。

⇒ 連携に関する課題
（全 11 件）

- ・親の希望と本人の希望がまったく違い、計画相談が板挟みになっている。
- ・早期療育の必要性からサービスを進めるが「面倒臭い」と言われる。
- ・親が本人の特性の理解が出来ない、容認できないため、支援への協力が得られない。

⇒ 家族に関する課題
（全 5 件）

<好事例> → 連携、信頼関係の構築

小学校 5 年生（支援級）女児。教諭がダウン症や障害特性への支援（声掛け）に対して知識が少なかったが、保育所等訪問支援で専門的な助言があり参加できる活動や行事が広がった。周囲の理解を得ながら学校生活を送ることが出来ている。

考察

同じようなケースや事例を出し合い話し合ったところ、知識不足や認識の違いからくる課題が多く見つかった。増加している事業所や利用希望者、関係機関それぞれが正しい制度の理解をすることが必要であると考えられる。